特集　アメリカの大学図書館事情

学生が図書館をもっと利用するように大学図書館が変わります

米国ピッツバーグ大学 司書　グッド　長橋　広行

図書館をどう利用していますか

「前学期は図書館に何回行きましたか」と質問されたら，あなたの答えは10回以上（1週間に1回ぐらい）ですか，それとも「全く行かなかった」ですか。「ケータイがあるから，ちょっと知りたいことを調べるのなら学習アプリでできる。ネットで読書もできる」という意見をよく聞きますし，『校内の図書館には行かない派』が増えていて，われわれ大学司書は，どうしたものかと悩みました。

世界的な傾向としても特にレファレンスコーナーの利用者が激減しました。私が勤務する米国ピッツバーグ大学中央図書館でも，近年はレファレンスコーナーの利用者数が急カーブで落ち込んでしまいました。図書館に来る学生と話すよりも，Eメールやチャットで質問に答えるバーチャル・レファレンスが主流になってきています。米国の大学ではすでにレファレンスコーナーを廃止してしまった図書館もあります。

質問する順番を待つ列はもう見られなくなりましたが，レポートを書いたり，グループでミーティングするなど，図書館を自分たちの勉強部屋という感覚で使う利用頻度は増えています。うちの中央図書館は特別な休日以外は開いており（2011年秋学期は日曜～木曜は午前2時まで，金土は夜10時まで），試験の前と試験期間の2週間は24時間開館しています。試験が近くになると，深夜になっても空いている机を探すのが大変なくらい混み合います。コンセント付きテーブルはもちろん，Wi-Fi完備。プリンター（学部生は1学期に600枚まで無料）やスキャナーが使えるコンピュータ・ラボ，各階にも自習用コンピュータ（MacOSとWindowsのどちらも）が並ぶコーナーを設け，さらにノートPCの貸出しもしています。でも建物や設備だけじゃなく，もっとも重要な図書館の情報サービスをもっと使ってもらえるように，大学図書館は大きく変わろうとしています。

まずGoogleやYahoo!で探していませんか

ある調査では，何かを調べるとき，大学生の90％以上がまずGoogleやYahoo!，bingを使うという結果が出ています。つまり大学図書館の検索システムがシンプルなら，もっと利用度が高くなるはずです。そんなGoogleのような使いやすさを目指したのがサモン（Summon）という統合検索システムです。ピッツバーグ大学図書館でも導入しました。入口のページにあるのは検索ボックスがひとつだけ，とすっきりとしています。

サモンとは召集という意味があります。必要な情報を呼び出す，というネーミングです。図書館の蔵書だけでなく，データベースや電子ブック・電子ジャーナル，デジタル化した古い写真や地図などのコレクション，さらにオープンアクセス（インターネットでの無料公開で誰にでも閲覧可能な学術論文）やリポジトリ（博士論文や教授たちの論文を収録した電子文書館）といった図書館内外に存在するさまざまな学術情報を索引ファイル（イン

写真１　米国一高い校舎「学びの聖堂」　ピッツバーグ大学のシンボル。

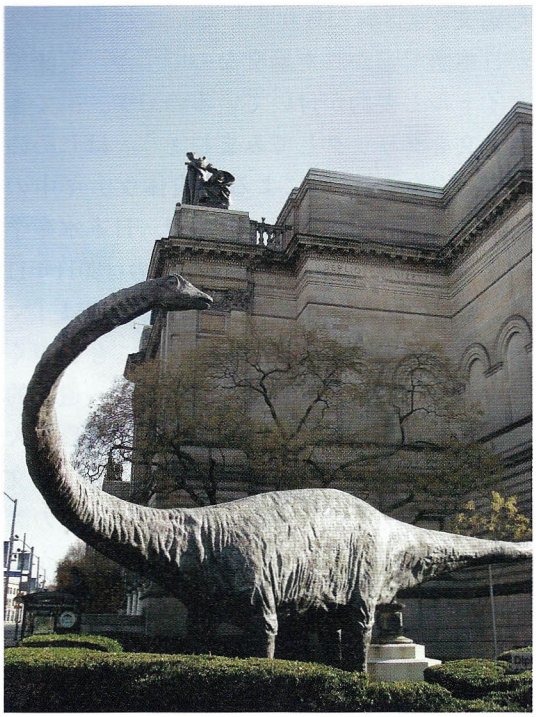

写真２　カーネギー自然史博物館の恐竜カーネギー　ピッツバーグ大学メインキャンパスのあるオークランド地区の人気者。

デクシング）化して，そのデータを１ヵ所に集めています。その膨大な情報源から，検索ボックスに入力したものに近い情報を呼び出してきます。

ピッツバーグ大学図書館の検索システムは，あなたのケータイからもアクセスできます。ただし検索とその結果を見るところまでは可能ですが，契約している電子ブックや電子ジャーナルの中味をダウンロードして読むことは学籍がなければできません。

写真３のように，サモンの検索システムは日本語の画面設定でも使えます。作成されたリソースの言語が英語や他の外国語であれば，検索結果はその言語のままで表示されます。ピッツバーグ大学図書館の蔵書のうちの28％は英語以外の世界30言語のものなので，各言語でも検索を絞り込めるようにしてあります。

サモンでどのように検索できるか，例として「Japanese DNA」とタイプしたときの検索結果をみてみましょう。113,720件のデータが選び出されました。画面の左に，データの内容を項目ごとに示したコラムが出ました。例えば書籍と電子ブックは3,293冊あり，いますぐオンラインで読むことができる論文は89,392件あると出ました。では，このオンラインでみられる論文の中から，さらに絞り込んでみましょう。言語分類のリストから日本語をクリックして絞り込んでみます。なんと日本で発行されている学術雑誌に掲載され

写真３　検索ボックスがひとつになったピッツバーグ大学図書館の新しい検索システム　日本語の画面設定もできます。

た論文が928本もありました。これらは本文が日本語で書かれた論文なのですが，英語でタイトルと要約が付いているのです。出てきた論文をクリックしてみましょう。はじめの論文は「DNA鑑定による多検体ウナギ中の外国種混入判別法」という題で，日本水産学会誌の11月号（本稿を書いているのは2011年11月です）に発表されたものでした。次は「マイクロサテライトDNA多型情報にもとづく日本鶏実用品種および欧米商用品種の遺伝的多様性と集団構造」という題で，東京農業大学農学集報の11月号の掲載。これらの論文は，J-StageやCiNiiと呼ばれる学術雑誌の論文を無料で公開している論文検索サイトから引っ張ってきているので，あなたも全文をダウンロードして読むことができます。

次にはじめから日本語で「日米関係」とタイプして検索してみましょう。はじめに出たタイトル「核不拡散・核軍縮と日米関係」をクリックするとCiNiiの画面に飛びました。この論文はオープンアクセスです。誰でも全文を読むことができます。二番目のタイトル「我部政明著『日米関係のなかの沖縄』」をクリックしてみると，今度はピッツバーグ大学図書館が購読している雑誌の情報ページに飛びました。まだデジタル化はされていませんが，４階の雑誌コーナーに行けばこの論文が掲載されている雑誌が見つかるはずです。直接図書館へ行かなくても，このように図書館HPからレポートのための資料を早くたくさん見つけることができます。

歴史ある大学図書館だからこそ，あきらめずにチャレンジ

ペンシルベニア州ピッツバーグ市のダウンタウンから５kmほど東のオークランド地区に，ピッツバーグ大学のメインキャンパスがあります。近くにはロボット工学で知られるカーネギーメロン大学があり，カーロウ大学，チャタム大学，カーネギー美術館，カーネギー自然史博物館，カーネギー音楽堂，ピッツバーグ・カーネギー図書館本館など，多様な研究機関，文化施設が建ち並ぶ文教地区の中心に位置しています。1787年に私立大としてスタートし，1966年からはペンシルベニア州からも教育費をもらうようになり公立大学になりました。90以上の学部専攻，200以上の大学院プログラムがあり，医学部と法学部もある総合大学です。特に「ピッツバーグ大学医療センター」は，医療施設の規模，医療レベルの高さ，革新性のすべての面で優れているという高い評価を得て，毎年，医大や病院ランキングの上位に選ばれています。日本のテレビドラマで「ピッツバーグ大学の病院に留学することにした」というセリフをいう場面を見たことがありますが，実際，日本からも多くの研修医が来ています。

ダウンタウンからでも見えるCathedral of Learning「学びの聖堂」は，全米一高い校舎（約160メートル，42階建て，2,000室以上）です。その高い塔と交差点をはさんだ対角に中央図書館のヒルマン図書館が建っています。北米の研究図書館（博士課程のある規模の大学図書館）のトップ25にランクされています。分館や地方キャンパスの図書館もいれると23館あり，このうち図書館システムが独立している医学図書館と法学図書館を別にして，残りの全館がピッツバーグ大学図書館グループとして統一されています。館長のミラー博士は64歳，アラカン館長です。アラサーaround thirtyとかアラフォーaround fortyって知っていますか。その上の世代，アラカンはaround還暦です。テレビもコンピュータもなかった子供時代をすごしましたが，ミラー博士は情報のアンテナを高く張っている人で，デジタル化をすすめる時代の大学図書館長として適任者だといえます。この館長，新しいデバイスが発売になると真っ先に購入して使い勝手を試しています。電子ブックリーダーは第一世代からの愛用者です。いろいろ

と試しすぎて１週間で１台壊してしまったというエピソードの持ち主です。

ミラー館長がよく口にする言葉のひとつに，「技術の進歩はいつも我々の予想をくつがえす」というのがあります。その気持ちでデジタル化時代に適した図書館づくりをしようとしていますから，毎学期ごと，うちの図書館には新しい設備やサービスが加わっています。

現在進めているおもな図書館プロジェクトは，D-Scribe（ディー・スクライブ）と名づけたデジタル・コレクション，図書館が出版社となって電子ジャーナルを発行するデジタル出版，D-Scholarship（ディー・スカラシップ）と呼ぶデジタル・リポジトリです。

DigitalのDとDescribe（表現する）をかけたこのプロジェクトは，美術的，歴史的に価値の高い写真や，ピッツバーグ地方の歴史を記録する19世紀の地図や文書，本など，100以上のテーマで集められた10万以上の画像とそのデータを整理したデジタル・コレクションです。浮世絵のコレクションもあります。

電子ジャーナルを購読するだけでなく，図書館自らが電子ジャーナルを出版するデジタル出版は，米国の大学図書館でも最先端の傾向です。プラットフォームと編集技術のサポートを図書館が提供し，研究者たちが自ら書き，査読（書き手以外の研究者による論文の審査）し，編集したものを掲載します。出版の条件はオープンアクセス（インターネットでの無料公開）であること，それと学術雑誌としての質を保つことだけです。その代わり図書館は一切のサーバ使用料や技術サポート費を請求しません。この方針に賛同した研究者たちの手ですでに14誌の電子ジャーナルが発行され，10誌が発行の準備を進めています。

D-Scholarshipは修士・博士論文，教授の研究論文を自分で登録，蓄積できるオープンアクセスの電子文書館です。いまピッツバーグ大学図書館では，教授たちがすでに学術誌で発表した論文もリポジトリに登録し，インターネットで無料公開できるようにしています。従来，教授たちは自分の論文を学術誌に投稿する際に，できるだけ載せてもらいたいので出版社が要求するまま著作権も出版社に渡してしまっていました。あとで自分の講義で使いたいときも，自分の論文に対して出版社に著作権料を払わなければいけないようなことも起こっていたのです。そうした状況を改善するため，ハーバード大学など５校と一緒になって大手出版社と交渉し，著作権が出版社にある論文もリポジトリに登録できるようにしました。

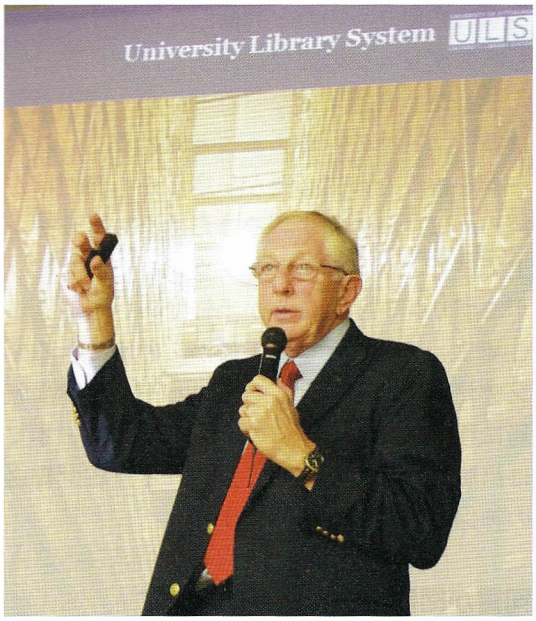

写真４　ピッツバーグ大学図書館長，ミラー博士　昨年10月，図書館の未来について，日本で講演しました。（撮影：松林正己）

そんな先取り精神にあふれるミラー博士ならではの失敗談もあります。電子ブックが続続と増えてくる中で，彼は電子ブックのための印刷機を購入しました。ひと息いれるくらいのわずかな時間で１冊が刷り上るというコンセプトで，「エスプレッソ」という名前の機械です。自分で試した電子ブックリーダーがまだ使いづらかったことから，より使いやすいタイプが普及するまでの４，５年間は図

書館に必要なものだと判断したのです。しかしエスプレッソの需要は思ったほど伸びませんでした。話題にはなったものの，学生たちは電子ブックの一冊まるごとではなく，レポートを書くために必要な一章とか一節だけが読めればいいのです。そこだけをスクリーン上で読むとか，データをダウンロードしてラボでプリントするほうが手軽でいいということです。必要なときに１冊から印刷できるオンデマンド印刷機は，ピッツバーグ大学出版局に移されました。この機械は，いま日本では出版文化の老舗として知られる三省堂書店の神保町本店にもあります。

司書が図書館からとびだします

さて，こうしたデジタル化が進む中で，大学図書館司書の新しい役割とは何でしょう。

米国の多くの大学では，新入生は新学期ごとに入学できるしくみになっています。ほとんどの大学がセメスター制（一学期は約16週間）かクォーター制（一学期は約12週間）です。ピッツバーグ大学図書館では，まず新学期に新入生に向けて図書館の講習会を行います。このときは，図書館の検索システムの使い方や，どこにコンピュータ・ラボがあるのか，ミーティング・ルームはどうやって利用できるか，という各階の案内とか，ラップトップの借り方，プリントアウトの受け取り方法など図書館の一般的な利用方法を説明します。

いよいよ各クラスの講義が始まると，コースごとの各課題やプロジェクトに役立つ本や雑誌，データベースの使い方に的を絞った講習を行います。教授がクラス全員を図書館へつれて来ることもあれば，または司書がクラスに出向いて講習することもあります。レファレンスコーナーで待っていることなく，こちらから学生たちに会いに行くことにしたのです。そうして信頼関係を築いて，私たち司書に気軽にメールしてくれたり，オフィスにも来てくれる関係をつくりたいのです。

大学の講義では，レポートを書く機会が多くなります。質のよいレポートとは，どんな内容でしょうか。それはクリティカル・シンキング（critical thinking）という目線で書かれたレポートだと米国の大学ではよくいわれます。クリティカル・シンキングは，直訳すると「批判的に考えること」ですが，反対意見や批判する内容が書いてあれば優秀なレポートだという意味ではありません。ひと言で日本語に訳すのは難しいのですが，研究しているテーマに関して，これまで誰が何を発表したか，それに対して自分はどう考えるか，というレポートを書く作業をイメージしてみてください。自分が書こうとしているテーマに関して賛否両論のどちらも，すでに発表された論文をできるだけ多く探しだし，目を通すことが大事になってくるのです。そのレポートのテーマをどう選んだらいいか，どんな資料を探したらいいかなど，具体的なアドバイスをすることも司書の本来の役割のひとつです。

私たち司書と教授は学期が始まる前から，実は課題のレポートやプロジェクトの内容について相談しています。その上で各クラスの学生が講義を理解し，良いレポートを書けるように，必要なデータベースや資料の入手方法をリストアップしたウェブページをLibGuidesなどの新しいソフトを使って用意し，講習にのぞんでいます。情報化，テクノロジーが進むからこそ，学生・教授とのつながりを大事にすることが，これからの大学図書館が最優先にするサービスです。

参考

1）ピッツバーグ大学図書館の検索システム：http://pitt.summon.serialssolutions.com/
エスプレッソ・ブックマシン/三省堂書店オンデマンド：http://www.books-sanseido.co.jp/event/promo_20110620.html